



特 別
~13
4183
4





程子卷八

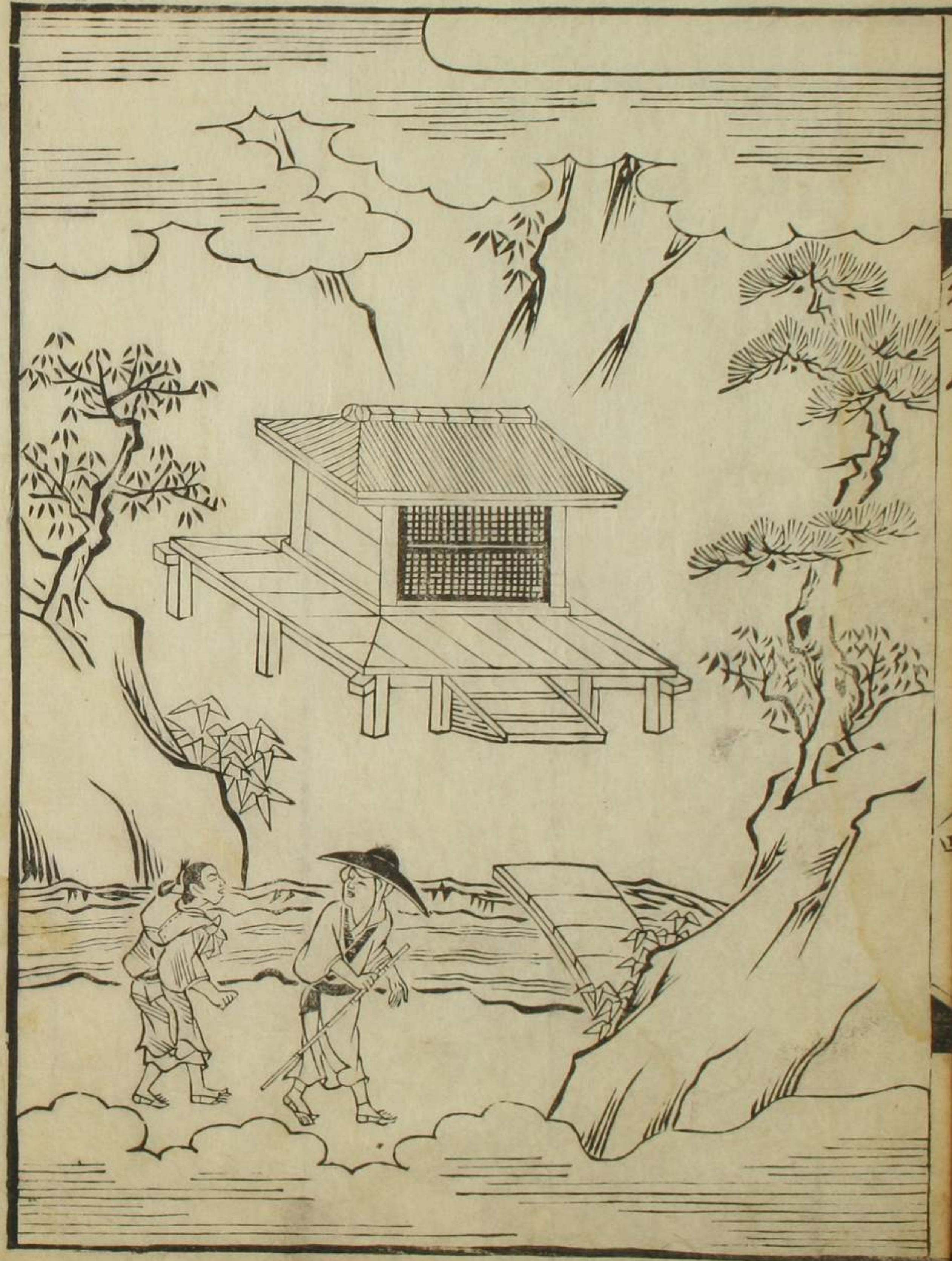
和歌山志卷之八
八瀬乃谷風呂ハ都々の人よりいへるものなりと入
りてしむれりく勅あり京より二里えうにれや山家な
つこふ本といふものとまゝして京より賣らんとぬ
とくは井でうき風呂とてうつよまを焼てその
氣とうふ海へ人の方此業め下や月夜先の
辰乃日は不乃よりそ競馬にがつと與ある見りの也
唐土性乃たけふ人多く骨にはよく居せ乃金更
○大原乃里ハ都々より二里より北あり村のあつく立
ちびんもゆさひくを時くハ都々く像のあつく
むしらふさそこのく一室のまゝなるのもがとくに
わら月乃むらりあの手ふ漏く流乃もハ都々なる

岡田眞
之藏書



うせられぬ文よむをくつにけりふはきてもうとてま
 しい山後のまゝとて紫とつふのを推つてまゝとつふの
 をあててまゝとて紫とつふのを推つてまゝとつふの
 をゆゑに布れぬとて紫とつふのを推つてまゝとつふの
 目とに糸うかしてまゝとて紫とつふのを推つてまゝとつふの
 ぬきまゝとつふのを推つてまゝとつふの
 ついてまゝの紫とつふのを推つてまゝとつふの
 とれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれりゆれり
 いてふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 して中紫とつふのを推つてまゝとつふの
 して紫とつふのを推つてまゝとつふの
 水あてを海つたふふふふふふふふふふふふふふふふ





○わがもよもよけり花をのちのいふ人あるのか
 一草の席りふひりよをとのきてあひくふ月日と
 こそ傍の人とわひあふととわあふたはゆもて
 どわる時をうとゆふつて人とも矢つを秋もわ
 ひどうもあふうふすのか一花もつりく今も
 こゆり

あそ比の愛もさひま今日けりをさけり一草を月
 とくたたりけりなふ人うとやまを
 ○あそ筒花入は移れさかひをさうとんとよま
 生花のうに世のあふつかれり命はなれあふれを
 ○はあ葉を都梅木乃里ハ草津の宿より二里と
 り乃東とく東海はほき乃而く小茶をわたりた

今更には竹大門よりわきよけ御堂ありと云ふよりふた
つゝ岩尾と云ふわり又いふ岩屋といふ名づゝ大石を所
よりらるゝく小立あへていふ門といふむけ一々客を
導く者なりと云ふ

郡といふは、さういふやうなところでは、さういふやうな
車坂と云ふところは、さういふやうなところでは、さういふ
のうたのうたをいひ

せとあういゝるこいじの車坂のゆる小鉢こちちとくういゝあき
まんぢるまんぢとくしてきく細こといふあつてふそるの
ぐどきりりりあおふてきぐまばのがつてきぐま
だてきくいゝるあきりあき屋やのちあきふあきり
あきりあきとくしてきくいゝるあきりあき屋やのちあきふあきり

ところよりかかれどもせとをどをいとなむはあやに
あゝもろくもや^{アキ}木^{ハシラ}榎^ノありつて来わ^{ミナ}福そ
の結びめぞでやとくばそわがゆわ^{イカウ}ア々々して
あたりまればよひ乃ぬるやうくと

まうり
 まあふりまをてえとてとらに比のひびぞろく
 あれまはみくゆりナ断つりかしてなりとかす
 うるまや乃滝たきうてふお布ぬいはをさうとわやし
 かどふ落たぎわりこもぞ胸のをほとゝあら人といふ
 りとて時めまはさむるところ俱くり聚りお所ところお勤こと
 名滝なたきなり

いぢ
たさ
ふじ



○年毎のみか月下の十日はちり都人たりといふや
 湯子洗川りもて被さるすわき湯湯子のせんやき社神社の
 うちより此のちと号と見えて川にハチ社ハチヤの
 かこよ流りあり六月被ハ天武天皇の御宇なりと
 まけり社神と被さるじりありあづといふ所をよみ
 十ガ年とそ麻マの葉をいそとせり也といふ所抄ヤクノよあり
 ちりあど海日ツキいありとそ六月の被とそ月
 被といふと定あはるをいけりありいそとそ
 ちとそわどとそあはるいそとそあはるいそとそ
 ねどあふと伏うつの火もあはるべしや社のがらふ所よ
 つも葉やの影あといつてなまきと松葉いそとそ
 おみそとと園子いんこをいそとそ竹たけよとそとあはるち雲の煙けむり

務員と申すは同じ目と雖も名づくる人へお思ふことの
多岐と申すは處々たる傷と云ふ海と云ふもへと國の
大名徳司のけりしとて初められたるして師おさうし
やめられと見えはつてふくしまとてその跡と結とてを
さうとさうつと思はれしとてしとて居るも傷のあひだ
難とさうつとけりしとてむきも様とてあひしとてむき
菅笠とのきとてゆとさうつとて或は細笠とて扱ふとて
しとて根柢やとてやふとてさうつとてさうつとて
とて人よとてさうつとてさうつとてさうつとてさう
わり知人とてさうつとてさうつとてさうつとてさう
つとてさうつとてさうつとてさうつとてさうつとて
うり耳とてさうつとてさうつとてさうつとてさうつ

あるとてさうつとてさうつとてさうつとてさうつと
けりしとてさうつとてさうつとてさうつとてさう
やうとてさうつとてさうつとてさうつとてさう
とてさうつとてさうつとてさうつとてさうつとて
でさうつとてさうつとてさうつとてさうつとてさ
おさうつとてさうつとてさうつとてさうつとてさ
おらさうつとてさうつとてさうつとてさうつとてさ
袖とてさうつとてさうつとてさうつとてさうつと
及ぬの人たけりさうつとてさうつとてさうつとて
とてさうつとてさうつとてさうつとてさうつとて
た村とてさうつとてさうつとてさうつとてさうつと
つとてさうつとてさうつとてさうつとてさうつと



双葉よ七日月やうれ暮るやう夜はじりてまづぬゆ
○瑞雪もこのころやゆきやあふすも細くゆき
ていふういふとわづらひ借るふ伴細のを風のそよ
雪のち風より前めんとはづけさはんげや
うやさん師いよやうな年

とうひゆくあふすも初ははる初折ふりて所
をういふうふも面やうあつ年国正月のまじり
歳旦乃教めり

まい百廿日初どころあふぬ
とつとゆきとてわづらひやうあつ年
よあつふれ初ふいふあつ年あつ年
○はあはる初ふいふあつ年あつ年

しあよきこいふまじりあつ年
はあはる初ふいふあつ年
かりきりあつ年
とてはあはる初ふいふあつ年
はあはる初ふいふあつ年
しあよきこいふまじりあつ年
はあはる初ふいふあつ年

春 梅梅より梅梅の古小神はる風のそよ
夏 けあふぬとせはるあつ年
秋 川うき船子とせはるあつ年
冬 冬ふり子とせはるあつ年

風六道乃ううとてゐる

比叡 拾う樂はを極ふ火は極ふあふふう極ふあれ
俄鬼 服従て極ふをう幕子かうううに極ふあ
畜生 命喰ふとらふかいらあうううううううう
修羅 血海つたう拾う風うううううううううう
人道 帷子の縫あやう風うううううううううう
天上 日月や星の舞う風うううううううううう
此の事うう成佛せうううううううううう

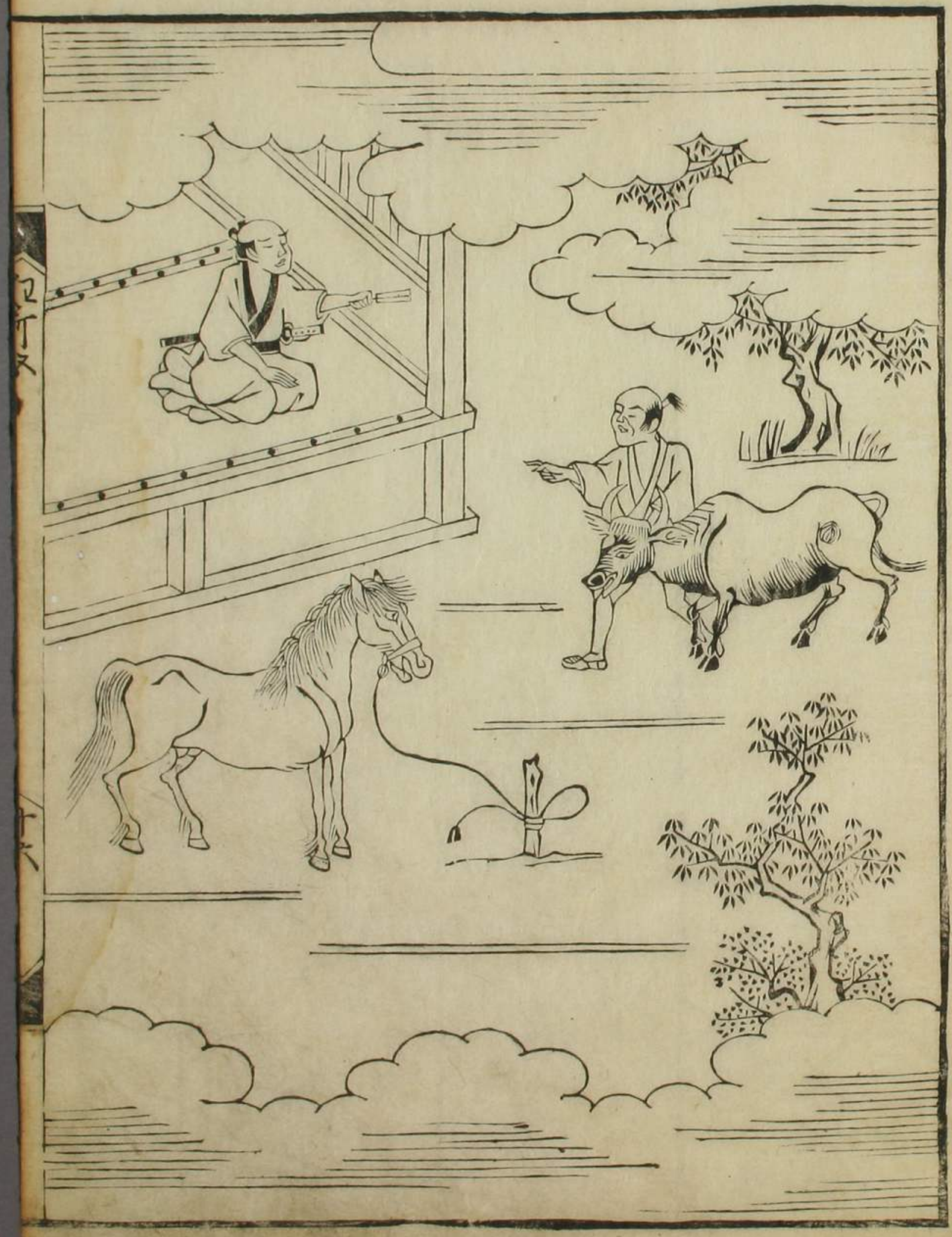
○山家乃今うううううううううううううう
ふもうううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううう

いうとゆうとあううううううと常ううううう

○あう人牛と買ううううう牛の極ううううう
ううううううううううううううううううう

こ牛の極ううううううううううううううう
ううううううううううううううううううう
極うううううううううううううううううう
まは能うううううううううううううううう
と極ううううううううううううううううう
うううううううううううううううううう
うううううううううううううううううう

へんがえりてしつりたるうたふどといふよふに
 なるくしてくぞつひまふ
 しのりて死とあて黄牛はなりあつとねのほふ
 ○あふ人宿轉毛のろと買ふろりとのかよへて見
 えられど地の用とえさうろくせんとく病にさ
 うつけしは黄主つよたるぬ
 馬の骨は古長方のさびつさげやとてあつと病にさ
 ○山後と飛う釣をさるる面や庚とら目言ふと
 就のうらふけらるるにみえの中よてあつと
 あとみくよたるふ
 山と源氏のきよあつといふもあやらタつたのやせ



○あゝ人々を^{いさ}と釣^つまふそ乃^{なり}飛^とハやうな心^{こころ}で耳^{みみ}
 いきうとれ乃^{なり}くられ^く時^{とき}乃^{なり}射^やハ勢^{いきどろ}しくくた
 ハ鳴^{なる}乃^{なり}くく大^{おほ}少^{せう}院^{いん}の教^{けう}

[illegible]

冬より法乃とてしを折るをむらぬ軍の免ハ

又あつたよ

せよたぬがうつかりや
 年ふとく後より

今これせうとてなれはうぬ漢とてたようじなれ
○せうとていふとていふとていふとていふとていふとて
ていふとていふとていふとていふとていふとて

又わろ時よりな

我家の頃分の種^{やうて}をたうけど弱^{ちやうど}とてめどつと世中
○山^{やま}は傾^{かたむ}き傍^{そば}の矢^やつとふ小^こ童^{どう}のあやまらありとて
こゝろあつとて年^{とし}どようもあらとわつとてわつといふ
世^よのあつとてまた山^{やま}もと耳^{みみ}は涙^{なみだ}とていつふつと

わづの傍に

生たの海にうかぬいのふらうふらうとまわつて
○じりやる能光朝にのす

ありたきあじふりそやうなつとめをけつた
まゝ秋のふ东山よおつ神系畏のわらうまをけ
とひきりこれをじり能あうやうとらあう
う山さけくけあう花まわうとや家畜神う
吾田の能まう海よま目明神と動結とり天の雲
戸の事よせそと神系畏とらづらとくそよ
見らるゑ

わづのなは玲あり神系畏凡あうとに組くの聲
○鼓鼻の病うて鼻のあう人類うにそまうとを

あうなづらふかうふかうとほまてよびわつと神
秋のうらう神雲のあり掛る面うなと鼻とふ
さつ免て鼻たう交わうとあうらとあうとと
まふ

あう能ととらる能神雲のうとまうふくまの鼻
けいんうらういてみ

我とうまう能まをたきとまのわつと神とあうん
○吾田の系人くあういてわをいあうと能とと
あうと寝入つて産まうのくをわつとまね
や海と海や吾田係のくわうと能ういさといふあう
とひまうよけいとおわうと

わづのなは玲あり神系畏凡あうとに組くの聲

○さふうに物ハあつねありそ物乃^{もの}快^{かひ}うふととて入さ
うかき^ご後^{きやく}京橋政入乃^{しやう}号^{ごう}う

ちやうどねむるの如きうてふはるねむるふたそとくじ
 とうとあひまんひよりて物乃やえんむじぶさとうと
 しとうあつちりまれとふよそれととうさまじなひ
 乃ゆくまもの中へ虎といふ文字と書てんとうまな
 流りあつて悲れそあといふ後へ大乃やえうふうけ
 うひ乃事とあひ出く虎といふ字と書てうあう
 とうによういつとまねをきいて悲うつはなうへう
 人よきてうみちまへそ乃人お知ひしういそ乃物
 虎といふ字とあひ出く虎といふ字と書てうあう
 虎といふ字とあひ出く虎といふ字と書てうあう

○様まうこれと様とてつなふるとおのれにけあてさ
ひえいえええハ様へおともて舞うつて候にそ
ぐり二階よりわづら物忘るゝやうなる様なり
さゆくよと下より上へてねんんとてはハ様
牙とわづらうとてさるびとせんころも米とて入
てうむと物とばばかりつくたやうく様を
トありとてとりくるまにこそ一層でるまにさうして
おくとまり様まうてんありけるやアといふなり
おふれとふ物と様とのつても米みをとられてさうさ

寛文十二年壬午仲夏吉辰武友氏書

書林

鈴木權右衛門板

